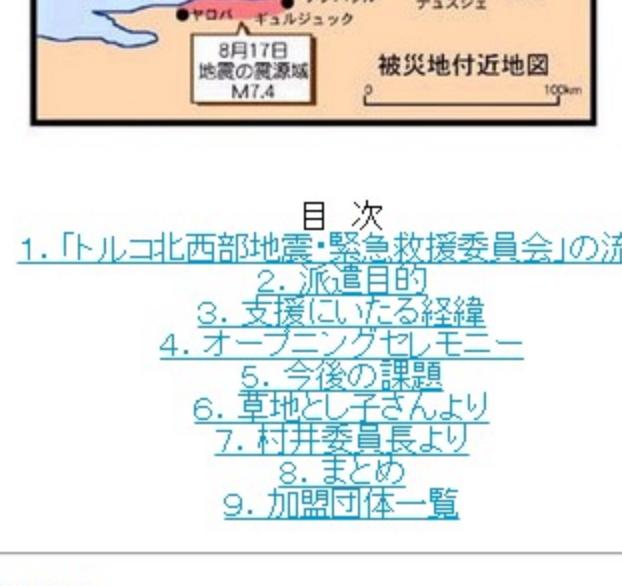


# トルコ北西部地震・緊急救援委員会

## 第6次派遣団

2月11日～2月18日



### 目次

#### 1. 「トルコ北西部地震・緊急救援委員会」の流れ

2. 派遣目的
3. 支援にいたる経緯
4. オープニングセレモニー
5. 今後の課題
6. 草地とし子さんより
7. 村井委員長より
8. まとめ
9. 加盟団体一覧

#### 1. 「トルコ北西部地震・緊急救援委員会」の流れ

1999年8月17日	トルコ北西部地震発生M7.4 事務局(被災地NGO協働センター)を中心に関係機関から情報収集を行う。	1999年11月12日	ボル地震発生M7.2 デリンジェ市民を中心にテントをデュズジェ市へ運びテント村を組織、アタチュルク中央公園内に第5テント村が開設される。
1999年8月18日	「トルコ北西部地震・緊急救援委員会」発足 委員長：村井雅清 事務局：被災地NGO協働センター 加盟団体：49団体(巻末参照)	1999年11月27日～12月10日	第4次派遣団(7名) デュズジェ市の第5テント村とデリンジェ市の支援プロジェクトの検討と進捗状況の確認を行う。デリンジェ市「市民文化化センター」建設支援について合意にする。
1999年8月24日～9月10日	第1次派遣団(3名) 被災地内の状況を把握するためスタッフを派遣。イスタンブル、ギョルジュック、イズミット、デリンジェ、アタバザル等を震源地近郊を視察する。	2000年2月7日～2月28日	第5次派遣団(2名) デュズジェ市第5テント村とデリンジェ市の支援プロジェクトの進捗状況の確認を行う。
1999年9月25日～10月4日	第2次派遣団(23名) 支援地図をデリンジェ市に絞り支援チームを結成し活動を展開する(看護、介護チーム、レクリエーションチーム、情報収集チーム)。また、メキシコよりNGO代表クラウドモックさんを招聘する。	2000年8月21日～8月29日	トルコKOBE被災地の子どもも交流の旅 デリンジェ市「愛と望みのテント」の子どもたちを中心に日本に招き、子ども同士の交流を行う。
1999年10月22日～10月29	第3次派遣団(8名) デリンジェ市内の支援プロジェクトの検討と被災地全体の状況把握を行う。 草地賢一さんが、イスタンブル主催の「インターナショナル・カンファレンス」に発題者として出席する。		

第5次派遣から今回の第6次派遣までは、NGOs KOBE イスタンブル支部のオーズハンさんやアルバッサンさんと連絡をとり、情報をやりとりする。今まで発行した委員会NEWSは、55報を数える。

#### 2. 派遣目的

トルコ北西部地震・緊急救援委員会(略称NGOs KOBE)が支援するデリンジェ市「市民文化センター(通称:草地文化センター)」の完成オープニングセレモニーへの出席と今後の運営についての協議。

#### 3. 支援にいたる経緯

前述した当委員会の5回にわたる派遣の中で、震源地であるイズミット市近郊であるにもかかわらず、あまり支援の手が届いていなかったことから、第2次派遣より支援地区をデリンジェ市として活動を開始。

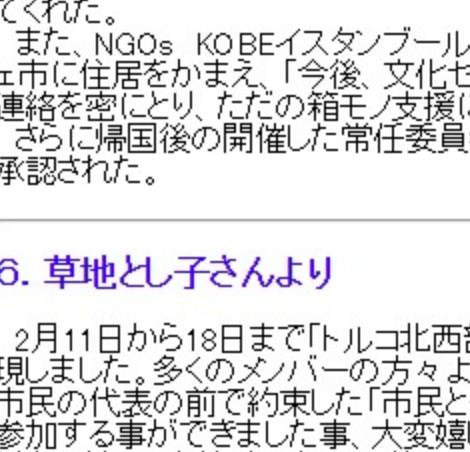
1999年末から2000年にかけて、ヤブスルタン地区テント村住民に対して、デリンジェ市内のNGO「DEKMAK」と地域住民の協力により「越冬食料支援」が行われた。

また、デリンジェ市「市民文化センター」が1999年8月17日トルコ北西部地震によって全壊し、以前から市民の集う「場」として中心的機能を果たしていたこのセンターを1日も早く再建することが、被災者であるデリンジェ市民に希望を与えることになると現地関係者と合意される。

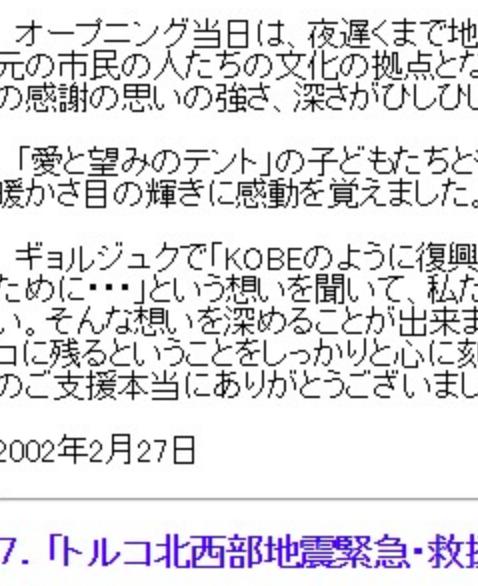
支援決定に際し、草地賢一さんが「完成後の運営は、デリンジェ市主導ではなく、市民と一緒に運営方法を考えていくこと。」を提案し、アフメット助役を中心としたデリンジェ市側も了解し、1999年12月に支援を決定。

支援決定後、KOBExの経験を伝えデリンジェ市と深い信頼関係を築いた草地賢一さんが2000年1月2日急逝し、デリンジェ市の中でも特に草地さんと親交のあったアフメット助役の代っての希望もあり通称「草地文化センター」となる。

建設地であるデリンジェ市ドゥムルブナール地区は、ヤブスルタン地区の隣に位置し、支援決定時はテント村として被災者が住んでいた。しかし、デリンジェ市の協力もあり、住民と協議の上、住民は他の地域へ転居し、建設が始まったのが2000年春頃。その後、トルコ全土を襲った経済危機の影響もあり、工事は難航したが約2年かかりで完成となった。



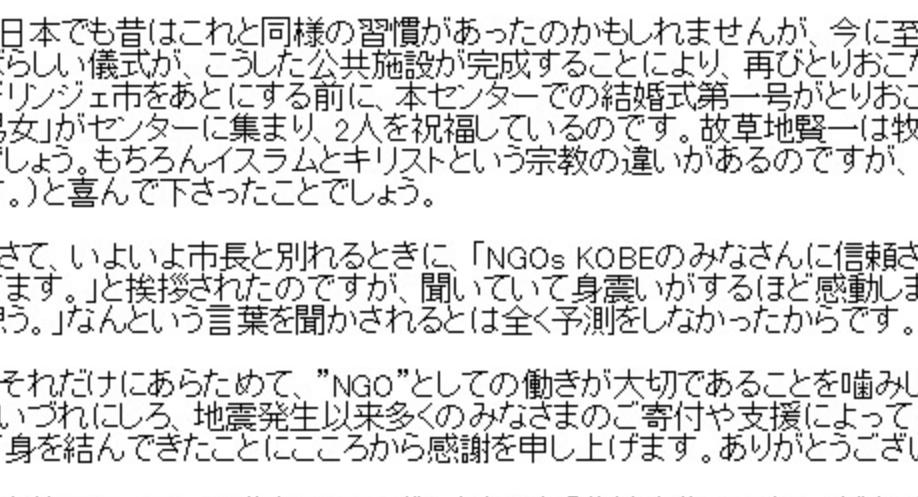
(建設途中の草地文化センター:2000年4月撮影)



完成した草地文化センター:2002年2月撮影

#### 4. オープニングセレモニー

2月15日(金)午後2時30分より、中央ホールに用意されたイス400席は、大人から子どもまでデリンジェ市民で埋め尽くされ、在イスタンブル日本総領事もお見えになり、オスマントルコ軍楽隊の演奏ではじまり、デリンジェ市長、アフメット助役の挨拶、村井委員長、草地とし子さん、駐日総領事の挨拶が続いた。



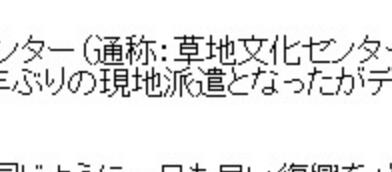
(挨拶をするデリンジェ市長)

その中で、アフメット助役からは、「このセンター建設に協力していただき、日本の全ての方々に感謝の意が述べられた。また、村井委員長はこの場に集まってくれた多くの子どもたちに、KOBExとデリンジェのつながりを語り継いでいってもらいたい」と述べた。

その後、「愛と望み」の子どもたちの踊り、スフィーの旋踊、民謡、伝統的な影絵など途中休憩を挟んでの2部構成で午後9時頃まで盛大に行われた。

「草地文化センター」の全容は、中央にトルコの伝統的な結婚式もできるホールを挟み、合計12の部屋がある。コンピュータールームや手芸教室、市民団体の部屋、子どもたちの部屋など市民が日常的に集まる部屋が用意されている。また、ドゥムルブナール地区の地区長の部屋や中2階部分では市議会も出来るサロ

ンとなっている。



さて、いよいよ市長と別れるときに、「NGOs KOBE」のみなさんに信頼されたことが最も誇りに思う。みなさんの意志が活かされるようなセンターに育てます。」と挨拶されたのですが、聞いていて身震いするほど感動しました。地方政府の首長である市長の口から「NGOに信頼されたことを誇りに思ふ。」などという言葉を聞かされた時は全く予測をつかなかったからです。

吉ヨルジュクで「KOBExのように復興しますように」という願いを壁に書いた女性の「復興を防災を自分たちの手で今できることを後世の子どもたちのために…」という想いを聞いて、私たちKOBExも今後100年のために今私たちが出来る事をやっていくという責任を市民の一人として担っていかなければなりません。そんな想いを深めることができました。今後、草地賢一の想いを家族が引き継いで見守っていきたいと思っています。「KUSACHIの名前がトルコに残るということをしっかりと心に刻み、私たち家族の第二の故郷であるという想いを裕子と2人で強くした本当に心温まる訪問でした。多くの方々とのご支援本当にありがとうございました。

今後は、二つ目の復興のシンボルとなつた「草地文化センター」が創り出す活動の支援が継続されます。一つ目のシンボルはこれまでニュースなどで紹介させて貰っている「愛と望みのテント」であること(いまでもあります)。

この2つのシンボルのことを、デリンジェの誰に聞いてもわかるようになることを願ひながら今回の訪問報告とさせて頂きます。(ほんとにご支援ありがとうございました)。

#### 5. 今後の課題

今後、「草地文化センター」を拠点として「文化的、芸術的な活動」さらには「しごと」「自立」「憩い」「交流」の「場」となるものとして期待される。中央の吹き抜けホールを挟んで12部屋あるこのセンターでは、箱モノだけの支援に終わらせないためにも、今後いかにこの文化センターがデリンジェ市民に有効に利用されるかが焦点となる。

トルコへの訪問は、昨年の5月以来になります。その時の用件は「日本・トルコ村」の件であったのですが、実はデリンジェ市助役アフメットさんが宿舎であるアバザルのホテルに訪れて来られました。この時点での「市民文化センター」(通称:草地文化センター)は、6割程度の完成度で止直言って「ほんまにできるやんやろか?」という思いが頭裏をかすめました。というのもそもそも支援が決定してから実行予定が1~2度遅れたことと、丁度1年前からのトルコの経済不況から各地の公共事業がストップし、デリンジェも例外ではなく厳しい状態であることから工事費の追加支援を依頼された経緯があるからです。

今回の訪問でわかったことですが、実は1999年8月17日の地震以来デリンジェ市における公共施設の再建第一号だったのです。つまり、他の公共施設の工事をストップしても本センターの完成を優先させたのです。それは、何故かといつてデリンジェの市民にとって今までのように結婚式をする市民センターカーがない、ということはいつまでも震災の傷跡となるのです。」というアフメット助役の言葉を象徴するように、トルコでは結婚するカップルを地域丸ごとが祝福するという習慣があり、それがアフメット助役の想いを抱いていました。

さらに帰国後の開催した常任委員会では、文化教室などへの追加支援を考慮し、8月～9月頃スタッフを派遣することが承認された。

#### 6. 草地とし子さんより

「草地文化センター」の全容は、中央にトルコの伝統的な結婚式もできるホールを挟み、合計12の部屋がある。コンピュータールームや手芸教室、市民団体の部屋、子どもたちの部屋など市民が日常的に集まる部屋が用意されている。また、ドゥムルブナール地区の地区長の部屋や中2階部分では市議会も出来るサロ

ンとなっている。

さて、いよいよ市長と別れるときに、「NGOs KOBE」のみなさんに信頼されたことが最も誇りに思う。みなさんの意志が活かされるようなセンターに育てます。」と挨拶されたのですが、聞いていて身震いするほど感動しました。

吉ヨルジュクで「KOBExのように復興しますように」という願いを壁に書いた女性の「復興を防災を自分たちの手で今できることを後世の子どもたちのために…」という想いを聞いて、私たちKOBExも今後100年のために今私たちが出来る事をやっていくという責任を市民の一人として担っていかなければなりません。そんな想いを深めることができました。今後、草地賢一の想いを家族が引き継いで見守っていきたいと思っています。「KUSACHIの名前がトルコに残るということをしっかりと心に刻み、私たち家族の第二の故郷であるという想いを裕子と2人で強くした本当に心温まる訪問でした。多くの方々とのご支援本当にありがとうございました。

今後は、二つ目の復興のシンボルとなつた「草地文化センター」が創り出す活動の支援が継続されます。一つ目のシンボルはこれまでニュースなどで紹介させて貰っている「愛と望みのテント」であること(いまでもあります)。

この2つのシンボルのことを、デリンジェの誰に聞いてもわかるようになることを願ひながら今回の訪問報告とさせて頂きます。(ほんとにご支援ありがとうございました)。

#### 7. まとめ

今回は、デリンジェ市「市民文化センター」(通称:草地文化センター)「オープニングセレモニーへの出席が一番の目的であり、村井委員長、草地とし子さん(はじめ6人)で訪問した。約2年ぶりの現地派遣となつたがデリンジェ市だけではなく、吉ヨルジュク、アバザルにも足を伸ばし有意義なトルコ訪問となつた。

吉ヨルジュクでは、壁に「KOBExのように復興しますように」という願いを壁に書いた女性の「復興を防災を自分たちの手で今できることを後世の子どもたちのために…」という想いを聞いて、私たちKOBExも今後100年のために今私たちが出来る事をやっていくという責任を市民の一人として担っていかなければなりません。そんな想いを深めることができました。今後、草地賢一の想いを家族が引き継いで見守っていきたいと思っています。「KUSACHIの名前がトルコに残るということをしっかりと心に刻み、私たち家族の第二の故郷であるという想いを裕子と2人で強くした本当に心温まる訪問でした。多くの方々とのご支援本当にありがとうございました。

今後は、二つ目の復興のシンボルとなつた「草地文化センター」が創り出す活動の支援が継続されます。一つ目のシンボルはこれまでニュースなどで紹介させて貰っている「愛と望みのテント」であること(いまでもあります)。

この2つのシンボルのことを、デリンジェの誰に聞いてもわかるようになることを願ひながら今回の訪問報告とさせて頂きます。(ほんとにご支援ありがとうございました)。

今後、「草地文化センター」を拠点として「文化的、芸術的な活動」さらには「しごと」「自立」「憩い」「交流」の「場」となるものとして期待される。中央の吹き抜けホールを挟んで12部屋あるこのセンターでは、箱モノだけの支援に終わらせないためにも、今後いかにこの文化センターがデリンジェ市民に有効に利用されるかが焦点となる。

トルコへの訪問は、昨年の5月以来になります。その時の用件は「日本・トルコ村」の件であったのですが、実はデリンジェ市助役アフメットさんが宿舎であるアバザルのホテルに訪れて来られました。この時点での「市民文化センター」(通称:草地文化センター)は、6割程度の完成度で止直言って「ほんまにできるやんやろか?」という思いが頭裏をかすめました。というのもそもそも支援が決定してから実行予定が1~2度遅れたことと、丁度1年前からのトルコの経済不況から各地の公共事業がストップし、デリンジェも例外ではなく厳しい状態であることから工事費の追加支援を依頼された経緯があるからです。

今回の訪問でわかったことですが、実は1999年8月17日の地震以来デリンジェ市における公共施設の再建第一号だったのです。つまり、他の公共施設の工事をストップしても本センターの完成を優先させたのです。それは、何故かといつてデリンジェの市民にとって今までのように結婚式をする市民センターカーがない、ということはいつまでも震災の傷跡となるのです。」というアフメット助役の言葉を象徴するように、トルコでは結婚するカップルを地域丸ごとが祝福するという習慣があり、それがアフメット助役の想いを抱いていました。

さらに帰国後の開催した常任委員会では、文化教室などへの追加支援を考慮し、8月～9月頃スタッフを派遣することが承認された。

今後は、二つ目の復興のシンボルとなつた「草地文化センター」が創り出す活動の支援が継続されます。一つ目のシンボルはこれまでニュースなどで紹介させて貰っている「愛と望みのテント」であること(いまでもあります)。

この2つのシンボルのことを、デリンジェの誰に聞いてもわかるようになることを願ひながら今回の訪問報告とさせて頂きます。(ほんとにご支援ありがとうございました)。

#### 8. まとめ

今回は、デリンジェ市「市民文化センター」(通称:草地文化センター)「オープニングセレモニーへの出席が一番の目的であり、村井委員長、草地とし子さん(はじめ6人)で訪問した。約2年ぶりの現地派遣となつたがデリンジェ市だけではなく、吉ヨルジュク、アバザルにも足を伸ばし有意義なトルコ訪問となつた。

吉ヨルジュクでは、壁に「KOBExのように復興しますように」という願いを壁に書いた女性の「復興を防災を自分たちの手で今できることを後世の子どもたちのために…」という想いを聞いて、私たちKOBExも今後100年のために今私たちが出来る事をやっていくという責任を市民の一人として担っていかなければなりません。そんな想いを深めることができました。今後、草地賢一の想いを家族が引き継いで見守っていきたいと思っています。「KUSACHIの名前がトルコに残るということをしっかりと心に刻み、私たち家族の第二の故郷であるという想いを裕子と2人で強くした本当に心温まる訪問でした。多くの方々とのご支援本当にありがとうございました。

今後は、二つ目の復興のシンボルとなつた「草地文化センター」が創り出す活動の支援が継続されます。一つ目のシンボルはこれまでニュースなどで紹介させて貰っている「愛と望みのテント」であること(いまでもあります)。

この2つのシンボルのことを、デリンジェの誰に聞いてもわかるようになることを願ひながら今回の訪問報告とさせて頂きます。(ほんとにご支援ありがとうございました)。

今後、「草地文化センター」を拠点として「文化的、芸術的な活動」さらには「しごと」「自立」「憩い」「交流」の「場」となるものとして期待される。中央の吹き抜けホールを挟んで12部屋あるこのセンターでは、箱モノだけの支援に終わらせないためにも、今後いかにこの文化センターがデリンジェ市民に有効に利用されるかが焦点となる。

トルコへの訪問は、昨年の5月以来になります。その時の用件は「日本・トルコ村」の件であったのですが、実はデリンジェ市助役アフメットさんが宿舎であるアバザルのホテルに訪れて来られました。この時点での「市民文化センター」(通称:草地文化センター)は、6割程度の完成度で止直言って「ほんまにできるやんやろか?」という思いが頭裏をかすめました。というのもそもそも支援が決定してから実行予定が1~2度遅れたことと、丁度1年前からのトルコの経済不況から各地の公共事業がストップし、デリンジェも例外ではなく厳しい状態であることから工事費の追加支援を依頼された経緯があるからです。

今回の訪問でわかったことですが、実は1999年8月17日の地震以来デリンジェ市における公共施設の再建第一号だったのです。つまり、他の公共施設の工事をストップしても本センターの完成を優先させたのです。それは、何故かといつてデリンジェの市民にとって今までのように結婚式をする市民センターカーがない、ということはいつまでも震災の傷跡となるのです。」というアフメット助役の言葉を象徴するように、トルコでは結婚するカップルを地域丸ごとが祝福するという習慣があり、それがアフメット助役の想いを抱いていました。

さらに帰国後の開催した常任委員会では、